

大人の不注意が子どもに死の危険をもたらす

2008.10.02

ヘルパンギーナや手足口病の流行がひと段落して、子どもたちは感染症から離れ楽しい日々を過ごしているようです。そろそろインフルエンザワクチンが始まる時期です。かかりつけの先生に相談して、遅くとも12月中旬には2回目の接種が終わるようにしてくださいね。

先日、こんにゃくゼリーでの1歳児の死亡記事が大々的に新聞紙面を占めました。危険性を告知するようになってから、17件目の死亡との事でマスコミはずいぶん騒ぎましたが、子どもの命を狙っているものは他にもまだまだたくさんあります。

日本はお産にかかわる死亡率と、1歳未満の死亡率は世界に冠するほど優秀な状態になっています。しかし、残念なことに1歳から5歳までの死亡率は先進諸国でも最低ランクで、死亡の原因は不慮の事故死が多いというのが特徴です。

不慮の事故死の内訳は、転落、窒息、溺死、交通事故などです。溺死は、お風呂でおぼれたなど家庭内で事故が多いといわれ、交通事故では3歳までは同乗中の死亡が大半です。

今回問題になった窒息による死亡では、こんにゃくゼリーが問題視されておりますが、その他にも原因になるものはたくさん知られています。

お年寄りのお餅は有名ですが、子どもでも発生しています。お団子、飴玉は報道はされませんが、意外と多いものです。死亡には至らない事が多いですが、3歳以降のピーナッツによる誤嚥は、小児救急に携わる医師にとってはまず一番に考えなければならないというくらい呼吸困難の原因になるものです。

子どもの小さな口でこんなものが飲み込めるはずはないと思いがちですが、35mmのフィルムケースに入るものは1歳の子でも飲み込める大きさです。

箸などの長いもの、食べ物などを口に入れているときは歩き回らせないようにするというのは、子どもを育てる上で最低限の注意事項です。子どもは体験を積ませる事が発達に大きな影響を与えますが、なんでもありではありません。行動には常に事故と隣りあわせだということを頭の中におき、二度と悲しい事が起きないように、賢い親であって欲しいものです。